

それでは、これをお願いします。

・・・・・・・・・・はい。・・・・・・・・・・意外と小さいのですね。

皆様そうおっしゃられます・・・・・・・・・・今後については御存知ですか？

・・・・・・・・・・はい、大丈夫だと思います。

そうですか、ではよい旅を・・・・・・・・

・・・・・・・・・・はい。

私は歩く、“種”をその手に。

暗い谷を飛び越え、荒れた大地を踏み抜く。

それは夢を見るための孤独な旅。

人はこの旅を宿り木プロジェクトと呼んだ。

荒れた大地に森を戻す計画、

数えきれないほどの品種改良を重ねた結果生まれた“種”、

それは人に夢を見させる“種”。

“種”は人のために生まれ、

そして、人は“種”のためにある。

“種”の糧に選ばれたのは人間だった。

最初に糧になったのは“種”を作った人だった。

彼は言った、

「幸せな夢が見れるだろう」と。

そして、“種”を手に彼は旅だった。

彼は、笑顔だった。

瞳には曇りなく、むしろ希望に強く低く輝いていた。

彼がどうなったのかは誰も知らない……、

でも、彼が残したものは彼の言葉を信用するには充分すぎるものだった。

やがて、誰かが思い立ったように“種”を手に旅に出る。

彼を追うように、荒野にその一步を踏み出してゆく。

また一人、また一人とそれに続いてゆく。

あるものは、希望を胸に、

あるものは、絶望に導かれ、

あるものは、夢を求めて……。

また一人……また一人……。

思いが、夢が“種”を運んでゆく……。

そして時は経ち、人は気づく、

旅立つ者達はいつも違う色を纏う、

だが、見送る者達はいつも同じ色だということに。

いつしか慣れる……。

それは当たり前のもことになる。

慣例ができてしまえば簡単なものだ、

あっという間に決まり事が出来た。

決まり事が出来れば、

後はそのルールに従って事が行われるだけだった。

人が一人選ばれた。

選ばれた人はこう言った。

「あの場所で待っているよ」

私にだけ伝わる言葉、

それだけが残った。

泣いた。

おそらく多分、

少なくとも瞳から何かこぼれ落ちた。

でももう覚えてなかった。

何かを失ったが、同時に何かを手に入れた気がした。

そのことはよく覚えている。

その日から毎日待っていた、

何かを抱えて選ばれる日を待っていた。

そしてそのは訪れる。

私は旅立ちの時どんな色を纏ったのだろうか？

見送る人たちの瞳は薄く冷たかった。

いつもと同じ色。

もうこの色を目にすることはないだろう。

“種”を手には私は私の色を纏って歩く。

あの日、手に入れたものを抱えたまま歩き出す。

千の朝と千の夜を超えてただ歩く。

これはなに？

使命感？

約束したから？

なぜ私が？

なぜあなたが？

一步ごとに浮かぶ疑問、

それは暗い海底から沸き立つあぶくのように。

小さな泡が私を揺らす。

抱えたものが少し重くなる。

大地に残す私の痕跡は、かすかに深さを増していく。

だから私は貴方の残したものを探した。

多分貴方が歩いた道、

多分貴方が見上げた空、

多分貴方がその身を横たえた岩、

そして貴方がの瞳に写った星。

かすかに残った貴方の匂いをなぞる。

待っているはずの貴方の元へ、

そう思うたび“種”が弱く薄く、

でも確かな熱量を持って鼓動するのを感じた。

一步ずつ、また一步ずつと、

貴方に近づくたびに鼓動は強くなる。

見たことのある景色、

嗅いだことのある香り、

聞いたことのある音。

ウミネコの鳴き声が私に思い出させる。

あの時と変わらぬ変わってしまったこの場所、

忘れ去られたはずなのに、それ故にか清々しくなっていた。

壁は年老いた老人のように、しかし純粹さを失わず、
赤い道は純血を守っていた。
キラキラと、ステンドグラスを通り抜けた光は、
大理石の床に鮮やかな絵を描く。
近いの場ではハツカネズミが笑いながら踊っていた。

あの時交わした言葉は何だった？
たしか他愛のないものだった。
あの時感じたぬくもりは？
まだ手の中に残っていると思う。
耳に残る音は・・・・・・・・、

貴方の笑い声？
二人の足音？
かすかに早くなる心臓の音？

どれも聞こえない、
聞こえるのは“種”の鼓動。

あの場所に貴方はいなかった。

どれほど時がたっただろう？
最初は、繰り返す朝と夜の回数を数えていた。
いつしか数は意味をなさなくなった。

私はしょうがなく、アコヤガイで砂を掘り、
幾つもの小さな砂山を作った、

夜空に浮かぶ星を拾っては、
一つ一つ小さな砂山の上にそっと置いた。
いつしかそれが、偉大なる神々の叙情詩を綴り始めた頃、
夜の帳は薄らいで、神々の名を冠した星々はそっと姿を消す。

雄鶏に導かれて姿を現す色彩は、
はじめてそれを目にした時と変わらず、瞳の奥を優しく焦がす。

風は甘く、遠くから聞こえる音は優しい歌だった。

私は立ち上がり、優しい歌とともに歩く、
踏みしめる砂は柔らかく、
波が足に触れるたび、貴方はくすりと笑った・・・・・・・・。

色を失った者の足元には2つの“芽” 一つの“夢”

Fin